

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 1980年代・新たな建築活動の展開

1980年代は全共闘運動の敗北と、内ゲバやあさま山荘に至る連合赤軍のリンチ事件などの悪戦苦闘の70年代を潜り抜け、新しい時代の到来を感じさせた。

1982年に発表された村上春樹の「羊をめぐる冒険」は衝撃的で、全共闘の空気や感性を引き継ぎつつ、新しい時代の空気を感じさせた。「マスメージング論」や「ハイメージング論」は1960年代に吉本隆明が展開していた世界を超え、大衆消費社会の分析と批判を展開していた。

共同設計・五月社一級建築士事務所は、施工図描きなどの下積の事務所から脱し、リゾートや都市型タウンハウス、診療所や個人住宅などの設計を受託するようになった。

東大・医学部のインターン・青年医師連合の俊才が白の巨塔・大学病院を飛び出し地域医療活動を開始した。埼玉県新座市の麦畑の中に木造の有床診療所を借り、地域医療活動の拠点とした。近くに土地を購入し、1看護単位、50床の病院を造る計画・設計を依頼され、1981年、鉄筋コンクリート造3階建て1300㎡の建物は竣工した。全共闘の若手医師を中心とした医療従事者の献身的な医療行為と医療技術の高さから、地域で高い評判となった。次いで6階建て、3500㎡、200床に増床する建築計画・設計に入った。第二期工事は1984年に竣工した。

三里塚・芝山連合空港反対同盟を支援し、現地で援農した活動家達は大地と農業を見直した。鶴川などに拠点を置く多摩生活協同組合の活動では、安全な食品を求める消費者は無農薬・有機栽培の食を求め、生産者と消費者の直接的な関係を求めた。

首都圏の消費者運動の活動家が「たまごの会」を結成し、筑波山の奥、茨城県新治郡八郷村に平飼養鶏と有機農業を複合した農場を開設した。若者と都市の消費者が農場で働き援農し、近くの契約農家が提供する有機栽培の農産物、卵を都市の会員に配送するネットワークを構築した。

私が鶴川団地管理組合の理事長をしていた時、「たまごの会」の会員が、八郷の農場から山羊を1頭連れてきて団地の芝庭に放した。子供たちは喜んだ。が、管理組合規約では犬猫を飼ってはいけないとの条項があり、禁止すべきだとの意見も出された。専有部分では飼うことは禁止されているが共用部分に放し飼いするのは良いので



茨城県八郷町の有機農場の家

は、との反論や、芝生の除草に役立ち植栽管理費の削減になるとの異論も出された。

賛否両論、しばらくの間、団地内ではこの話題で持ちきりになった。

結局、理事長である私は山羊の所有者に、団地の共有地からの退去通告をせざるを得なくなった。

後日、山羊の持主から鶴川団地から八郷に引越すことの相談を受けた。小高い山の中腹に農場を建設したいので、その計画・設計を依頼された。建築主が私に示した条件は次の通りだった。

1. 自然景観を大切にする農場とし、平飼養鶏や有機農法菜園、堆肥を中心に土作りをする。
2. 石油化学建材は使わず、地場の自然素材で家を作り、家に土間と作業場を確保する。
3. 八郷の木舞泥壁、瓦、建具などの素材と工務店、大工、左官、井戸掘り等により施工する。
4. 化石燃料に頼らず太陽光、メタンガス発酵、木炭などの自然エネルギーを活用する。

八郷の合田農場は1981年に竣工し、その後、八郷に移住する住居や、千葉県鴨川の鶏倶楽部の農場、八ヶ岳の山荘などエコロジカルな農場計画や家造に携わった。

これら、一連の作品は「住宅建築」誌に発表した。

1980年、37歳だった私は、有機農業や地域医療などの新しい社会的運動と連携した建築活動を展開するようになっていた。

事務所に泊まり込み徹夜で新築設計や修繕設計をこなす体力があった。お茶の水の東京デザイナー学院で建築設計の講師をしていたので、優秀でセンスの良い学生達に図面作成のアルバイトをしてもらった。この中から特に見込みのありそうな学生は卒業後も事務所のスタッフとして採用した。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所共宰者。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。